



彦根藩と国友鉄砲鍛冶

江戸時代の初め、幕府は彦根藩の井伊直継に「鉄砲」製作を命じ、これを完成させた直継は、あわせて、とくに念入りに仕上げた「小筒(小銃)」を送り届けました。これを喜んだ將軍徳川秀忠は、礼状(写真)を直継に送りました。文面は次のとおりです。

鉄砲の儀申し遣わし候ところ、早速出来、ならびに其方より差し越され候小筒、台・かな具、何も残すところなく、家以下まで念を入れ到来、祝着斜めならず候、委曲阿部備中守申すべく候、
 謹言
 極月晦日 秀忠(花押)
 井伊兵部少輔殿

手紙に年記はありませんが、直継が「兵部少輔」を称することから、慶長11年(1606)以降のものと考えられます。当時、徳川幕府は大坂城攻めを念頭に着々と軍備を整え始めており、この手紙も、そうした緊迫した情勢の中で書かれたものでしょう。

慶長19年12月に始まる大坂冬の陣では、彦根藩は大きな戦功を挙げましたが、とくに鉄砲の威力は絶大でした。

彦根藩と鉄砲との結びつきには、二つの要因がありました。一つは砲術家稲富祐直(一夢)との関係、もう一つは近江国友村(現長浜市)の鉄砲鍛冶との関係です。

稲富は、もと細川忠興の家臣で、当代随一と呼ばれた砲術家です。関ヶ原合戦前、主君の怒りを買って逃亡の身となっていました。井伊直直(直継の父)が関ヶ原合戦後に佐和山城に一時かくまったのです。

彼の名は、慶長7年ごろの「分限帳」(家臣の名簿)にも「千石 稲富一夢齋」と見えています。千石というのは重臣の待遇、直直は砲術において彼の弟子であったと考えられ、その厚遇ぶりがつかえます。

彼がいつまで彦根に滞在したか不明ですが、直政没後、清洲藩主松平忠吉に、さらに家康に仕え、慶長16年に亡くなっています。

この間、彼は多くの武将に砲術を伝授しました。宇津木泰繁・沢村之相・齋藤昌形ら彦根藩の家臣たちも伝授されています。

一方、彦根藩は国友鉄砲鍛冶に接近し、有力者国友兵四郎に百石の知行を与えて家臣とし、鉄砲役を命じました。後に、稲富はこの国友鍛冶を家康に推薦し、慶長15年以降、大坂城攻めに備えた大筒(大砲)の大量注文が実現したのです。彦根藩を介した稲富と国友鍛冶の関係は、幕府にとって、また彦根藩にとっても重要な意味を持つていたのです。

秀忠が直継に命じた鉄砲の詳細は不明です。

しかし、慶長17年11月3日、幕府の注文を請けて国友鍛冶が五十匁玉大筒58挺を完成させ、幕府代官・鉄砲奉行の検査により試し打ちが行われた際、彦根藩から鉄砲吟味役として宇津木泰繁・内山正全の2人が派遣されたと伝えられています。手紙の日付「極月(12月)晦日」から推測すれば、この時の大筒であった可能性は大きいと言えるでしょう。

直継は大筒の完成を將軍秀忠に報告するとともに、特製の小筒を將軍に献



徳川秀忠書状(彦根城博物館蔵)

上したのではないでしようか。

(彦根城博物館学芸員 母利美和)

※徳川秀忠書状は、彦根城博物館テ
 ーマ展「彦根藩の砲術」で3月6
 日(水)から4月8日(月)まで展示しま
 す。